

近代日本の女同士の親密な関係をめぐる一考察

——『番紅花』をいとぐちに——

赤 枝 香奈子

はじめに

近年のセクシュアリティ研究では、これまで「性愛」（あるいは恋愛）と呼ばれてきた現象・言説の脱構築が目指され、「性」と「愛」の分離を前提とする立場に基づき、特に前者を研究の対象とする傾向がある⁽¹⁾。「同性愛」もまた、「愛」という語が含まれながらも主としてセクシュアリティ研究において取扱われるテーマである。本稿では近代日本における女同士の親密な関係について考察を行う。そこには従来「同性愛」と呼ばれてきた関係も含まれているが、ここではそのような関係を「性」と「愛」を分離した上での「性」の問題としては捉えていない。なぜなら当時の女性たちにとって「性」がそもそもどのように認識され受けとめられていたか、いまだ十分に明らかになっていないからである。現在では別々に論じることが可能な「性」と「愛」が、女性の恋愛をめぐる言説の中でどのように重ね合わされたり分節されたりしてきたか、その過程をたどる試みとしたい。

明治・大正期の「女の言説」をもとに、女性のジェンダーとセクシュアリティの変容を検討した牟田和恵は、女性の地位や権利を高め、個としての女性の自我を確立しようとした女性解放の思想が、逆に女性を家庭のなかに妻・母として固定化し、女性自身からセクシュアリティを疎外していったことを明らかにした（牟田 1996）。それを強固にしたのは新たに登場してきた「国民」としての意識である。牟田の研究は、それまでほとんど論じられてこなかった、日本の女性たちによるセクシュアリティ言説の歴史的変遷を取り上げたものとして高く評価されている。ただし、このような国民意識と結びついたセクシュアリティがどのように登場し、それ以外のセクシュアリティを「駆逐」していったかについては明らかにされていない。また牟田は「女性たちは自発的に、国民を産み育てる母親と

⁽¹⁾ 例えば赤川学は「セクシュアリティの歴史社会学の方法基準」の一つに、「性（セクシュアリティ）と愛（親密性）を論理的にも、歴史的にも、独立した現象として分析すること」を挙げた上で、前者を分析対象としている（赤川 1999：75-77）。

自己規定し性の自由を放棄してい」った（牟田 1996：145）と述べているが、それは平塚らいてうら近代国家と非常になじみのよい女性たち以外にとって、どの程度「自発的」な過程だったのか、またそれ以前に女性が享受し得た「性の自由」などそもそもあったのか、などについても疑問が残る。男女が愛し合い性的に結びつくことを自然とする強制的異性愛という制度は、同性愛の否定を不可避免的に伴う。異性愛の自然化、絶対化が進むこの時代、同性愛という表象あるいは認識についてもなんらかの変化が起こったと考えられる。それは性科学という西洋からの知の導入とも無関係ではないだろう。

近年、19世紀のアメリカで中産階級の女性たちの間にみられた「ロマンティックな友情」と呼ばれる女同士の親密な関係が再発見、再評価されている。渡辺和子によれば、ロマンティックな友情は当時の女性たちにとって「普通のこと」であり、「継続的におこなわれ、日常化していたために言説化も必要ではなかった」が、「19世紀末に向かって異性愛関係が普遍化され制度化されることによって排除されはじめることで、歴史的な事実として言説化され、『ロマンティックな友情』、『女同士の絆』などの呼び名を与えられた」という（渡辺和子 2001：27）。そのような「ロマンティックな友情」のタブー視に大きな影響を与えたのが、ヨーロッパから入ってきた性科学であった。性科学では異性愛が正当化され、同性間の親密な関係は「性的倒錯」、「変態」として否定されていたからである。

近代日本における男性同性愛の変容をたどった古川誠は、前近代から続いていた「男色」がやがて性科学の影響を強く受けた「変態性欲」として認識されるようになり、その過程において男女ともに使われる「同性愛」というカテゴリーが成立したことを明らかにした（古川 1994）。このように近代以前からの連続性・非連続性が解明されつつある男性の「同性愛」に対し、女性の「同性愛」についてはその認識の成立や変遷がいまだじゅうぶんに明らかにされないまま、「性」の問題として扱われている。古川は「個人化された性のなかに正常と異常を発見すること、これこそが同性愛概念のもたらした新たな性認識の枠組みである」（古川 2001：91）と述べているが、それは果たして女性の「同性愛」にも当てはまるのだろうか。

本稿では以上のような問題意識から、明治末から大正初期に見られた女同士の親密な関係をめぐる言説を分析する。その際、らいてうと同じく「新しい女」として『青鞥』で活躍した尾竹一枝が1914年に発行した雑誌『番紅花』を分析のいとぐちとしたい。明治末から大正初期は、現在の使われ方とほぼ同義である「性」の概念（当時の言葉では「性欲」）が登場した時期であり⁽²⁾、また女性同士の「同性愛」がある事件をきっかけに注目された時期でもある。『番紅花』を検討することは、異性愛を志向したらいてうらによる『青鞥』との対比において、また女性たち自身が同性間の親密な関係をどのように捉えていたかを

知る上で重要である。本稿での分析を通し、近代日本における女性「同性愛」の概念が当初、何を問題化したもので、それは「性」とどのように関わっていたのかを明らかにしたい。

1. 『番紅花』について

『番紅花』（さふらん、1914年3～8月）は『青鞥』の同人であった紅吉こと尾竹一枝が、『青鞥』退社後に創刊した雑誌である。紅吉は『青鞥』を良くも悪くもかき回した存在として、またらいてうの「同性愛」の相手としてよく知られた人物である。『番紅花』は部数およそ600部（渡邊 1984：5）⁽³⁾という同人誌的規模であり、わずか6冊をもって自然廃刊となった。現在では復刻版が出版されているが、対象を『番紅花』に絞って分析した研究はない。

「純藝術雑誌」を目指して創刊された『番紅花』には、一枝が松居松葉から借り受けたという舞台写真や海外の女優、バレエダンサーらのグラビアがふんだんに使われている。また新進の音楽家原信子や女優松井須磨子らが執筆、編集に携わり、海外の演劇事情なども報告されている。『番紅花』にとって大きな協力者だったのは森鷗外であるが、それ以外にも武者小路実篤、阿部次郎、小山内薫、小沢愛閑、田村俊子、長谷川時雨、与謝野晶子ら、当時の一流の文学者たちが寄稿している（鷗外以外はそれぞれ一編ずつ）。とはいえ、中心となっている執筆者は一枝を含む6人の同人——神近市子、小笠原貞子、小林哥津子、原信子、松井須磨子——と、一枝の妹である尾竹福美と浅井三ッ井、そして八木麗子（稽古に忙しくなった松井須磨子にかわり、二号より編集担当）、八木さわ子（麗子の妹）、岡田八千代（伊達虫子、劇作家）、原信子、青山菊栄（後の山川菊栄）、菅原初ら若い女性たちである。表紙には後に一枝の夫となる富本憲吉の版画絵が用いられている。

創刊のきっかけについて一枝は、『青鞥』であんまり叱られたので、それならこっちも、といった気がまえた」と述べている⁽⁴⁾。つまり『番紅花』には『青鞥』に対する対抗

⁽²⁾ 小田亮によれば、セクシュアリティの訳語として「性欲」が用いられ、やがて「性」という語がセックスやセクシュアリティの意味において使われるようになったのは1910年代である（小田、1996）。本稿でも同様の意味において「性」という言葉を用いているが、「性」という概念は歴史的に構築されたものであるという立場から、本稿で対象とした時期においての「性」と現在の「性」がまったく同様の概念であるとは考えていない。むしろ、そのずれに着目することで、女性の「性」にまつわる言説において「性」（性的欲望やその充足、エロス）が語られていなかったことを明らかにしていきたいと考えている。

⁽³⁾ 渡邊（2001）では2000部くらいとなっている（渡邊 2001：105）。

⁽⁴⁾ 平塚ほか、1956『『青鞥社』のころ』『世界』123号。

意識、さらには『青鞥』を念頭に置きそれとの差異化を図った編集が見られる。例えばそれは一枝が創刊号で述べている「柔かな匂いのあるものでありたい」「決して濁れた艶もうるほひもないようなものにはしてゆきたくはない」という言葉に象徴されている。

さらに「比較のお互ひの仕事なり人間を理解仕合つてゐる人だけが集まつてお互に勉強して自分を育てあつてゆこう」（一枝）、「自分が自分の行くべき道に進んで行くと云ふ事が同時に此番紅花を愛し育てて行くと云ふ事になるのだと信じて居る」（小笠原貞子）といった言葉からは、彼女たちにとって芸術はあくまでも自己を育てるための手段であるかのように見える。まず『番紅花』の具体的内容を検討するにあたって、当時の女性たちにとって文学を筆頭とした芸術に取り組むことの持っていた意味を考えていきたい。

2. 女性の自覚と女同士の親密な関係

『青鞥』は「女流文学の発達を計り」「他日女流の天才を生む事」を目的として創刊された雑誌である。それは編集責任者であつたらいうの本意ではなかったと言われている（堀場 1988：59）。しかし当時、「文学に携わること＝女性の自覚」との認識があつたのは確かである。1963年の「座談会『青鞥』の思い出」では、板垣直子が『青鞥』について、「婦人の解放とか地位の改善とかいうことが根本」だが、「それを文学で表わす以外に考えなかったので、文学で出発した」と発言している。それへの同意を示した生田花世は次のように付け加えている。『『女子文壇』』というのがあつて。（…）そこに集まった若杉さんとか山田邦子とか杉浦翠子とか、それからわたくしなんかは、やはりどうして生きていくかという問題にぶつかつて、それをとつつかまえて、追求するには、文学以外になかった（…）それ以外に女の人が自分の道を開くのに方法がなかった」のであると。その『女子文壇』については「四、五年前に、『青鞥』よりも早く世の中に出て、これをリードしたのが男のかたで、自覚運動ということを吹き込んだわけです。女性よ、自覚せよ、と。それで各地がみんな動き出した」と語っている。そして『女子文壇』で小説を書いていた者たちが『青鞥』のある間はそこへ「部屋借り」していたが、『青鞥』がなくなったのちに10人ほどが集まつて『ビアトリス』を始めたと述べている。この発言は、日本女性の近代史において突出した存在として捉えられがちな『青鞥』を、「文学に携わること＝女性の自覚」という流れの中で捉え直すものといえる。

ここで触れられている『女子文壇』とは1905（明治38）年1月に創刊された、初の女性だけを対象とした文学投稿雑誌である。『青鞥』参加者には生田花世をはじめ『女子文壇』投稿者だった者が少なくなかった。『青鞥』が創刊される1911（明治44）年、第七巻まで

の『女子文壇』を分析した飯田祐子によれば、五巻以降「〈覚めたる女〉の集う先鋭的な雑誌であることが、『女子文壇』の特色にな」った（飯田 1998：30）⁽⁵⁾。だがその〈覚めたる女〉は『女子文壇』という投稿雑誌において文学への昇華を促されることはなかった。飯田はその文学には昇華されないが、文学をめぐってあらわれる欲望を「独立の意地、女同士の友情、上京、弱さと決意」として取り出し、女性にとって文学が「独立と女性の連帯を生み出す装置」であったことを明らかにしている（飯田 1998：33-34）。

しかし、このような欲望が『女子文壇』で見られた直後に創刊された『青鞥』では、女性の連帯が模索されることはなかった⁽⁶⁾。それはらいてうによる樋口一葉批判（『青鞥』[二一十]）が原因と推測される木内錠^{てい}の退社にもみてとれる。「小説を書きたいと考えた女性のほとんどが一葉小説を愛し、一葉を目標にしていた」（中山 2002：212）と言えるような状況下で一葉を批判することは、一葉を「姉さんの様」と慕っていた錠のみならず、数多くの文学愛好の女性たちを批判することにもつながる⁽⁷⁾。らいてうに先だって与謝野晶子も一葉を批判している。つまり、ここでは次のような対立の構図が明らかになってくる。中山清美はらいてう・晶子対一葉を崇拝する多数者の対立を「新しい女」対「旧い女」と位置付けた（中山 2002：214）。もちろん、この場合の「新しい」とか「旧い」といったことの指示する内容は必ずしも明確でない。またこの両者が「対立」したというほど後者が力を持っていたかどうかは疑問である。だが、『青鞥』の中でこのような女性間の温度差、さらには差異化が見られたことは確かである。一葉批判の時点ではらいてうの側にいた紅吉も、まもなく『青鞥』を退社し、やがてはらいてうによって「先天的な性的転倒者」と呼ばれ⁽⁸⁾、『青鞥』同人との差異化を図られている。

らいてうは、当時の紅吉への気持ちを「同性愛的な気持」ではなかったと述べている。その見解はらいてう研究者たちにも踏襲されている。井出文子もその言葉を受け「おそらく彼女は同性愛者ではなかったのだろう」と述べている。らいてうは「生涯に一枝ばかりでなく、高群逸枝らの女性に熱い愛を送」たにもかかわらず。なぜならそれは「穏やかで正當的、常識的な愛のあり方」だからということである。

井出は一枝については「らいてうへの同性愛的感情があったかも知れない」としている。

⁽⁵⁾ 主筆の河井醉茗も『女子文壇』七―七で同誌について「自由、破壊、解放などを唱へる女が集まって来る雑誌」と述べている（飯田 1998：29）。

⁽⁶⁾ 拙稿、2002「『青鞥』における「女」カテゴリーの生成」『ソシオロジ』144号。

⁽⁷⁾ 中山によると、明治30年代、特にその後半以降、一葉の小説や書簡文は文範となり、『女学世界』には一葉小説に倣って創作したと思われる投稿小説がいくつも並んだという（中山 2002：212）。

⁽⁸⁾ この言葉は、『青鞥』[四―四]（1914年）に掲載されたハヴロック・エリス「女性間の同性恋愛」のらいてうによる序文に出ている。

その根拠は「一枝には自分の心を引きつけた対象に、全身でうちむかってしまうあまりにも純粋な感情がありすぎた」ということである（井出 1987：100）。また折井美耶子は一枝が能力を持った女性たちに援助の手をさしのべていたことを「一枝の一生のうちで誤解されやすい同性への熱中」と呼んでいる（折井 1985：100）。この場合の「誤解されやすい」とは「同性愛であると」誤解されることを意味しているのは言うまでもないだろう。渡邊澄子は「一枝における看過できないテーマは『レスビアン』問題」とした上で、このように従来あまり肯定的に評価されてこなかった、一枝の女性に向けた愛情を逆に高く評価する。そして一枝を「女を愛する女」と呼んだ（渡邊 2001：342）。ここでは同性に対する多大な愛情を肯定的に評価するか否定的に評価するかの違いはあっても、同性愛者の指標として用いられるのが、相手に向ける愛情の質や程度であることに違いはない。しかし愛情というものを厳密に客観的に測ることなどそもそも不可能なのではないだろうか。

このように女性同士の「同性愛」は定義が曖昧でありながらも、しかしなんとか自分をそれとは無関係としておきたいと思わせる程度には「異常視」されている。しかし近年のセクシュアリティ研究が明らかにしてきたように、単一の、歴史的に不変な「同性愛」概念は存在しない。ではこのように不安定な「愛情」という基準によって規定される女性の「同性愛」概念は、どのように登場してきたのだろうか。

次節ではまず『番紅花』に描かれた女同士の親密な関係を見てみたい。そこには、率直に同性との親密な関係を欲する心情が表現されている。それは「女性の連帯を生み出す装置」でもあった文学に携わる女性たちにとっては、特異なテーマではなかったであろう。

3. 『番紅花』に見られる女同士の関係

『番紅花』には女同士の関係を主題にした作品が少なくない。その理由として、一枝がかつてのらいてうとの関係を綴った作品を書いていることなども挙げられるが、その一方で菅原初の小説やエドワード・カーペンターの『中性論』などでも、同性間の関係がテーマとなっているからである。

菅原初は後に『青鞥』にも「旬日の友」（〔五―三〕）を書いている人物である。この作品は『青鞥』の「レスビアン関係を記した」三作品のうちの一つに数えられている（渡辺みえこ 1998：271）。菅原初は『番紅花』に「雪のふる日（詩）」（一号）、「動揺（小説）」（四、五号）、「免職の日迄（小説）」（六号）を書いている。「動揺」には主人公美津の親しい友人としてKという人物が登場する。「旬日の友」にもKという人物が登場し、これらは同一人物かとも推察されるが、この二つの作品の連続性（あるいは断絶）は興味深い。な

ぜなら、「旬日の友」には「動揺」では描かれなかったような、身体を介した、より親密な関係が描かれており、その関係を「同性の愛」かどうか自問する姿が描かれているからである。菅原初自身については、同人誌的規模であった『番紅花』にこれだけ作品を書いているにもかかわらず、どういう経歴の持ち主であるかまったくわかっていない。ただ、「動揺」を自伝的小説と読むならば⁽⁹⁾、彼女は九州出身で、尾竹一枝が短期間在籍した女子美術学校の学生であり、その縁から『番紅花』に参加したと推測される。また「動揺」「免職の日迄」の主人公がともに地方の女学校の教師であり、美術学校卒業後は教師をしていたらしい。

「動揺」では、学校時代を過ごした東京を離れ地方都市で暮らしている主人公美津の、友人たちとの交流の様子が描かれている。物語は以下のようなものである。

美津は「愛人であった」というほどに愛着を持っていた東京から離れ、U市で教師をしている。職を得た当初は「独立して行かれるといふことの愉快」もあったし、「職業もつ片手で出来る丈の研究を続けるつもり」でプログラムなども作ってみたが、実際にはその半分も消化できない。田舎街での生活は退屈で「毎日欠伸びながら生き」ている。ただこのような生活ゆえに友人と頻繁に手紙をやりとりしたり、また度々上京し友人たちと再会することで、交流が途切れることはない。それでもやはり「よく気の合った友達と文学談をもち出したり、感想を聞いたり、聞かされたりする」「娯楽の一つ」も、また「一旦話に油が乗ってくると夜を越しても話す」ということもなく、「どうにかして都に行きたい。思う存分に自分の仕事が見たい。自分の仕事に生きてゐるやうになったらどんなに…」と思い、「始終動揺している」。

学校時代の友人で、今は同じような境遇のMと、東京に住んでいるKに対してはとりわけ思い入れが深い。四号ではMとのエピソードが中心になっている。同じ寄宿舍だった美津を「妹のやうに可愛がつた」Mだが、ある時から遠ざかっていた。しかし友達に重きを置く美津は「Mのことを忘れてしまうことはどうしても出来」ず、また「Mもまるで美津のことを忘れてしまうことは出来ないだらう」とどこかで思っていた。そしてその通り、二人ともが職を得たのち、交流は復活する。ある時Mから手紙が来る。「思ふと随分永く手紙をかかなかつたのね、然しあなたに対する私の心は安心した—— 恰度姉妹のやうな一種言はれない温味が音づれない時でも、離れてゐるときでも、恰も相接してゐる時と少しも変らぬ心持が通つてゐるんです。…」そしてぜひ会って話がしたいと言う。再会した

⁽⁹⁾ 「動揺」を自伝的小説と読む根拠はKの描写にある。Kと美津は××校時代、寄宿舍で知り合い交友を深めたが、Kはすぐに舎を去ったこと、その後一時大阪に帰ったが、やがて××社に入ったこと、東北地方の紀行文が××新聞に掲載されたことなどの記述から、Kとは紅吉こと尾竹一枝であると推測される。

二人は一晚語り明かし、その時以来Mからは必ず週に一度手紙が来るし、美津も「大に書く」。美津が「私の好きな、友達、敬愛してゐるあなた」、「私のこの胸も、心も、眼も、手も、すべてを捧げて迎えたい」と思うM。そんな美津は、自分と「Mとの交渉はこの後どこまで発展するか、ふたりのローマンスはどこまで続くか、今そんなことを考えて居はしない」という。

続く五号では、文展行きで再び上京した際のKとのエピソードが中心になっている。美津が来るのを待ち望み、ぜひ自分の家に一晚泊まるようにと言っていたKは、美津に自分の希望や仕事の計画を語る。美津は「一直線に自分の仕事に突き進み得るKの上が羨しく、また「若いながらも既に生活の音色を出し」「全身の血を沸かして自己の仕事に向つて緊張してゐるKが頼もし」く、彼女の「活々した眼」を見て話しているうち自分も活々してきて仕事の計画などを話す。この上京で美津はかつて親しい間柄でありながら、ある時から疎遠になってしまったSと偶然再会する。Sの「燃えて、燃えて、焼き尽くさねば止まん火のやうな彼女の感情」に「或るインテレスト」を持った美津だが、「一寸した感情の行違ひ」からそのまま別れてしまっていた。KはKでHと再会し、「話聞かされて泣かされて」しまう。美津はKから餞別の小歌をもらい、友と、東京と別れ、U市に戻って行く。

このように「動揺」では、若い女性たちの交流そのものが主題になっている。そして女性間の親密さが深まることに対する期待や好奇心はあっても、そのことに対するうしろめたさなどはまったく見られない。

この時期、尾竹一枝ら『番紅花』の主たる書き手たちは、『青鞥』にはほとんど参加していない⁽¹⁰⁾。時間は遡るが、木内錠は「一葉女史論」を『青鞥』ではなく『女子文壇』(1912年12月)に書いている。これらは、当初『青鞥』という一つの場に集まった女性たちが、自分の心情や思想を表現する際に雑誌の選別をしていたと見ることができる。そこで彼女たちに選ばれた『番紅花』の特徴は、上で見てきたような女性同士の関係が前面に出ていることと言えよう⁽¹¹⁾。

『青鞥』は女同士のつながりよりもヘテロセクシュアルな関係を重視していた。そのため紅吉＝一枝を「先天的な性的転倒者」と呼び、女同士の親密な関係を異常視していた側面がある。『青鞥』でのそうした傾向に反し、『番紅花』ではちょうど同じ時期、このように女同士の親密な関係が描かれていた⁽¹²⁾。「動揺」に描かれた、「Mとの交渉はこの後どこ

⁽¹⁰⁾ 岡田八千代のみ、『青鞥』に一編書いている（〔四－五〕）。

⁽¹¹⁾ 神近市子も創刊号で、自分のする翻訳について、「女の作家で紹介されて居るものは余りない相だから、私はなる丈女の人を紹介するつもりで居る。（…）ほんとうの意味から矢張り女が一番女に近くなければならぬことを私は近頃考へて居る」と述べている。

まで発展するか、ふたりのローマンスはどこまで続くか」という思いからは、二人の関係がありきたりな友愛ではなく、より親密になることへの期待が見られる。それは相手を「私の好きな、友達、敬愛してゐるあなた」と呼び、「この胸も、心も、眼も、手も、すべてを捧げて迎えたい」と思うような、身体性を伴う親密さである。そこに「性的」関係かどうかという現代の「同性愛」概念を適用するのは適切ではない。しかしそれは「性」と関連させ理解される可能性をはらんだ関係である。

三号から五号には、青山菊栄によるカーペンター『中性論』の翻訳が掲載されている。その翻訳のきっかけを神近市子は次のように記しているが、そこには、同性間の親密な関係を「性」と結びつけて捉えている様子が見られる。

何時か青山さんとお逢ひした時に同性戀愛のお話が出た。その時にカーペンターの説によると同性戀愛は異性間のそれよりはもつと精神的なものでそれを善い方面に導けば一方が他をどんなにも感化誘導してゆけるものなど云ふことが有つて、大變面白い見解があるとのことであつた。それをこないだお目にかかつた時に抄譯お願ひは出来まいかと伺つたら、抄譯する位なら全譯したいとのことで今度の「中性論」となつた次第である。(…)性の研究は近頃云々されて居るし、又實際これ位面白い研究はあるまいと思はれる。殊に中性の男女は近頃日本にもポツポツ表面に現はれて来て一部の人々の間には一問題となつて居る。今カーペンターのそれについての研究を見せて貰ふことは可成興味のあることと思ふ。(「編集室にて」三号)

ここで述べられている通り、カーペンターの『中性論』は「中性者」⁽¹²⁾ たちが取り結ぶ「同性戀愛」の社会的価値をその精神性に求める内容となっている。それを同性間における肉欲の否定とみなすことはたやすい。しかし神近の言葉に見られるように、このような精神的つながりもまた「性」の範疇に入れ、関心を持たれていることに注意する必要がある。それは当時のマスメディアに見られた「同性戀愛」を異常視する視線（「一部の人々の間には一問題」）とは必ずしも重なっていない。「性」という当時としては新しい知的トピックと結びつけられ、同性愛はなにか魅力的なものとして、さらには社会を改革する可能性を持つものとして捉えられている。このことは西洋の性科学を日本の女性たちがどの

⁽¹²⁾ エリス「女性間の同性戀愛」の『青鞥』への掲載は1914年4月だが、前号の「編集室より」には既に「『女性に於ける性的転倒』はもう譯了になつて」いるとの知らせがある。

⁽¹³⁾ カーペンターの説明によれば、中性者とは「其の生活及活動が専ら同性の愛に激励される人々のことであつて、(…)其の同性に対する愛が最高の努力を生む特殊のタイプ」ということである。

ように受け入れていったかということを示す一例でもある。

4. 女同士の親密な関係への注目

西洋の性科学が日本で「通俗性欲学」として広まるのは1920年代のことである。らいてうの「先天的な性的転倒者」という規定はイギリスの性科学者ハヴロック・エリスの「女性間の同性恋愛」(Sexual Inversion of Women)を踏まえてのことである。これはかなり早い時期での性科学の受容と言えよう。よって他の『青鞥』の女性たちが、らいてうのようにこの見解をすんなりと受け入れたかどうかは疑問である。『番紅花』の書き手たちにもまだ、「同性恋愛」を異常視するような態度は見られない。だが、女性同士の親密な関係を「性欲」の異常として捉える見方は1911年頃に始まっていた。そのきっかけとなったのは、1911年7月に起こった女学校卒業生の令嬢同士による心中事件である。古川誠によれば、そもそも「同性愛」という言葉もこの事件を機に登場したものである(古川1996a)。

当時の『婦女新聞』ではこの事件がかなり大きく取り上げられている⁽¹⁴⁾。8月11日号の社説「同性の愛」では事件について、「新聞紙は之を同性の愛、世俗に所謂オメの関係なりとして審しまざる様子なるが、同性間に、果して異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や。容易に信じ難けれども、若し眞に成立し得るものとせば、娘持つ母及び女子教育家は、最愛なる子女の監督法に就て新なる警戒を加へざるべからず」として、この問題を「真面目に研究」しようとしている。その結果「所謂同性の愛なるものには二種別あり、一つは純然たる友愛の情の熱烈なるものにして、他は女夫婦世俗に所謂オメの関係なるものなり」という知見を得る。少し長くなるが、その分類を以下に引用しよう。

前者は、意氣相投合するか、若しくは、多難の境遇が兩者同一なるか、或は著しく類似せるかの場合に、姉妹の契りを結び、生死を共にせんと誓うものにして、燃ゆるが如き友情以外、恥づく忌むべき何等の関係をも有せざるなり。故に、此の場合の愛は相愛にして、極度の仲好といふに過ぎず。(…)この種の愛は熱情ある男子間にも間々存する事あり(…)。この種の同性の愛なるものは、男子よりも女子に多し。最近の博士官吏二令嬢亦是なるべし。

⁽¹⁴⁾ 『婦女新聞』は1900(明治33)年、「女子教育方針の確立、善良な家庭の創造、女子の体位向上、家事経済の知識の普及、婦人団体の交流・発展」などを目的に掲げ刊行された週刊新聞である(『婦女新聞』を読む会1997:3)。

後者の所謂オメなるものは、実に不可思議の現象にして、今日の生理學心理學にては殆んど説明しがたし。然り、説明はせられざれども、事實の存在は否定すべきにあらず。恐らくは是れ病的現象ならん。日刊新聞紙は、同性の愛といへば悉く此の種の者と解し、最近の博士令嬢等をも此の關係の如く報じたれども、吾等は全く別種の者なりと信ず。即ち前者に於ては、關係ある二人の境遇年齢性格等が相似たるを要するに反し、後者は一人が必ず男性的性格境遇の女子にして、他を支配するを要す。前者は熱烈なる精神的友情に因て成立するに反し、後者は不可思議なる肉の接触を俟ちて成立するが如し。

これに続き、特に注意すべきなのは「前者に屬する同性の愛が女學生間に案外多」いこととなっている。こちらの「同性の愛」は「後者の如き墮落關係にあらずして、高潔なる友愛の一致なれば、道德上寧ろ賞すべきに似たれども、友愛の情火燃え上りて、常識と共に他のすべての道德を焼き、果ては自己の身體生命をまで焼き盡して悔いざるまで極端に嵩じては、最早これ眞の友愛にあらずして、狂的若くは病的友愛」であり、「戀愛的墮落と同じく一種の道德的墮落たるを免れず」と述べている。一方、後者の所謂「オメ」については「前者の病的友愛なると同じく、病的肉欲とでも稱すべきものにして、生理學者も醫學者も未だ鍼を入れざる未開墾地なれば、吾等はここに論斷を下す事能はざれども、不可思議なる事實の存在だけは如何にしても否むべからず」として、「單に同性なるの故のみを以て安心」せぬよう、娘を持つ親たちに注意を促している。

同じ号の第四面にも「同性の愛の研究」という特集があり、医師や女学校の卒業生、心理學者、洋行帰りの男性など7人の話が載っている。それらにおいても「同性の愛」に対する「不思議な現象」「不思議な關係」という見方はある程度共通している。だがその内容には差があつて、自分が知っているわずかばかりの知識、例えば「近傍に女夫婦と呼ばれる二人の夫人があつて、それが全く夫婦關係の如し生活をなし」ていたなどの話と結びつけて理解しようとしている者もいれば、「オメとか何とかいふ様な關係が事實に存在しようとは信じ」ないと、はなから存在を否定している者もいる。ただ、そのような關係の存在を認めている者は全員、一方または双方の女性が「男性化」しているとの説明を行っている。つまり、「境遇上男性的生活をして、生存競争場裡に奮闘するような婦人は、すべての心理狀態が男子のやうになってしまはしない」こともない、そうすれば「筋肉も細胞も男子のやうになり、生殖器も女性としての本能を失うかもしれぬ」とか、「西洋では珍しくない例」で「老嬢が多くなれば、そんな變性的不具者はどうしても増加する」、「同性の愛といふけれども、其の一方は既に心理的に男性になって居る」などである。この記事は「真面目に研究せねばならぬ」というわりには、様々な人から聞いた話の寄せ集めにす

ぎなかった。それに対し、次号の島中雄三「同性の戀と其實例」では、より「研究」⁽¹⁵⁾に近づいた内容になっている。

そこでは「同性の戀は若い女性の間に屢々ある、女十人の中の七八人迄は必ず同性の或る一人に對して淡い戀を味つた経験があらうと思ふ」として、それを男子間の同性恋愛、すなわち薩摩の男色になぞらえている。

初めは精神的であつて、終に肉體的に陥るのであるが、一度肉体的関係が生ずると更に精神的に新しい意味の結合が出来て、全く夫婦のやうな関係になる、此の徑路は男女間の戀愛に於けると同じである、そして其原因は、性欲が自然的なる方法によつて満足されない所から已むを得ず横道に逸れたのであつた、病的現象なるは無論である。既に男子の間に斯ういふ病的戀愛があるとすれば、女子の間にも之れに類似の戀愛があるのは不思議ではない。

ただし今回の事件については「同性の戀であつたとしても、其戀が肉體的にまで進んで居つたといふ推定は、情死といふ單純なる事實から割り出すべく餘りに輕率」で、「自分の考えでは、寧ろ其の関係は案外に淡い精神的の戀に止まつたであらうと察せられる」というように、前号の社説と同じく「肉体的な関係ではなかった」という見方をしている。

これらの言説では、女同士の親密な関係について三つの区分があることに注意しておきたい。すなわち、「通常の友愛／病的友愛／病的肉欲」という分類である。このうち、「性欲」と最も強く結びついているのは「病的肉欲」であるはずである。しかし、これらの言説において問題化されているのは「病的肉欲」ではなく「病的友愛」の方である。つまり、「異常／正常」の線引きは肉欲において、あるいは肉欲と友愛の間でなされたのではなく、友愛の中で行われている。ここでは「同性の愛」を性欲の問題として捉えようとしつつも、問題の焦点は性欲から友愛へとずらされているのである。

この「同性の愛」事件以降、女学生の同性愛がクローズ・アップされ、やがて同性愛といえは女性とりわけ女学生のものとされるようになったという（古川 1996a：207⁽¹⁶⁾）。ではこの「同性の愛」という言葉の誕生以前、このような女性間の親密な関係が見られなかったかということ、そういうわけではない。先の記事などで「肉欲」と結び付けられていた

⁽¹⁵⁾ 島中もこの問題を「女子教育家の機関紙とも云ふべき婦女新聞としては、必らず研究しなければならぬ重要問題の一つ」と捉えている。

⁽¹⁶⁾ その証左として上げられているのは安田徳太郎の「何と女同士の同性愛心中が多いことか。まるで同性愛は今日では女子によって独占されているやうな觀を呈している」（1935年）という言説である。よって、女性間の同性愛が注目されてからおよそ20年の間に、どのようにしてそのような状況となるに至ったかは、今後明らかにされるべき課題であるといえよう。

「オメ」こそが、もともとはむしろそれと差異化されていたような関係、すなわち女学生同士の熱烈な友愛を指した言葉として使われていたのである。

5. 「お目」の流行

1910（明治43）年10月号の『ムラサキ』に掲載された「女学生同士の愛人『お目さん』の流行」（たつ子）¹⁷⁷では、「一昨年頃から始まった風習で、今年になっては益々流行する『お目さん』のお話」が紹介されている。

それによると「『お目さん』流行の本家本元は、学習院女子部であったが、次でハイカラ学校の名を得た虎の門の東京女学館に移り、忽ち驚くべき勢いを以て各女学校に傳染し」、「今日では以上の二校を始め、東京第一高等女学校、三輪田女学校、山脇高等女学校、成女学校、女子大学等到るところに全盛を極むるやうになった」という。そして『お目さん』とは「詰り女学生同士の間に起る所の、不可思議千萬なる愛情である」と述べ、次のようにその関係を説明している。

年長上級の女学生が、新人下級の美しい罪のない愛くるしい年少のお嬢さんを見染め、アア可愛らしいと思ふと、これを『御連中』といつて、同級中最も親善な友人四五乃至五六人から出来上つてゐる團隊に向ひ、

『私新入學の誰々さんが可愛らしいから、お目にしたいのですが、何うでせう』と相談をかける、お目とは、愛人が愛人を呼ぶ隠語なのである。

相談を受けた御連中のうち、其名指された可憐の少女に対する先愛者がなければ、『それでは取持ませう』といふことになる。

相談主の女学生は、大喜びで、直ぐに由縁の紫、或は燃る想の紅のリボンを御連中に渡す、御連中は極めて秘密に其愛された少女を呼んで、そとこれまでの成行きを囁きつつ、リボンを手渡しするのである。

少女若し黙して、其のリボンを受取り、緑艶やかな髪に結べば、相談即ち纏つた験しで相愛いとも濃かに相呼ぶに御目さん御目さんの隠語を以てするやうになる。

そのように「お目さん」になった二人はどのようなことをするかについては、以下のやうに描かれている。

¹⁷⁷ 岡野編『アンソロジー 女と生活』（2001）より。

鈴の音一しきり遊戯の時間を報じて、マアガレット、廂髪（…）が算を乱して薄暗い廊下から雪崩れて出る、紅黄紫白りボンの色ひらりはらりと風に靡いて嬉戯するの時、

姉さんのお目らしいのが、木陰なんかにソッと身を潜めて、相圖の笛軽く吹けば、妹のお目さん花に誘はれる蝶の姿、ツトよつて無言の握手、相見る眼と眼に、無限の愛ぞ溢るる。

この「お目」という呼び名については、起源はわからないが「二人の愛成つてお目出たい」の意、あるいは「お目に懸つたが愛の緒」の意などではないかと推測されている。しかし「何れにしても、研究する程深い意味は無く、また「お目」という言葉も「オヨメに近くて優しく聞える」というように、この関係が異常視されている様子はない。「兎に角、愛は女性の寶」であり、「學生互に相愛するのは、殊に美しい」からである。ここでは「お目」が「愛情」関係として認識されていることがわかる。

また同時期の『女学世界』にもこの「お目」のことが綴られている（上原綾子「卒業前の女學生」『女学世界』一〇—五、1910年）。そこでは、おそらくこの「お目」という関係の宿命であったであろう卒業間近の悲しみの様子も描かれている。

此の時間が終つて廊下へ出ると二年の美代さんがもう来て待ちうけて居たのでスイと列から抜けて無言のままバルコニーへ出ると（これはいつも私達二人の御きまりで）美代さんはあの大きい眼をうるませながら「姉さまはほんとにもう僅かになつちやつたのね」と涙声でいふ。

「さうね、でも卒業したつてまた學校へもちよいちよい来ますしそれに二人は毎日でも電話でお話ができるんですものどうか泣かないでね…あ、さうさうあのあしたでも學校の帰途にどこかへ行かなくつて？」

「どんな處？遊びに？」

「え、また妙華園でも何處でも…なるだけ静かな人のない様な木の陰でどつさり御話がしてみたいわ」

「某女學校ではこの私達二人の様なのをオメと称して居るそう。名称こそちがへこれはいづこも変り無き事実で、我が校内だけでも幾組あるかもしれない程だ、そして卒業前になるとそのいはゆる互にオメったりオメられたりしてる二人はよく裏山の杉の木立の中だの遊戯用具室の片隅などに会して人目をさけつつきぬ名残を惜しむのである。」

これらの言説からわかるのは、「お目」と名付けられた「不可思議千萬なる愛情」とは、主に女學校の上級生と下級生の間に持たれる特別に親しい関係を指しており、彼女たちは

それぞれ「姉」「妹」になぞらえられていたということである。この姉妹というメタファーは、「女學生間に姉妹熱と云ふ奇妙なる一種の流行病がある」（白虹氏「恐るべき姉妹熱」『明治の家庭』）⁽¹⁸⁾ というように、この流行を否定的に捉える側の言説にも見られる。このように女学生同士の親密な関係を姉妹関係に比すことは、その関係が通常の友情関係より親密なものであるが、性的なものとは無縁であることを暗黙のうちに示していると言える。

6. 「お目」批判の転換

「お目」の流行に向けられた批判もまた「性」とは関係がないものだった。「女學生同士の愛人」では、『お目の愛』は、果して左様な善美の愛でございませうか」との疑問が提起されつつも、「何も弊害は無いでせうが、寒心に堪へない」と述べ、「大切な嬢様がたに、悪い風習の及ばぬやうに、充分氣を付け」るよう促すに留まっている。ここでは、「お目」は若者の間にはやる悪習の一つとみなされているにすぎない。また『女学世界』に掲載された三保野純子「呪はれたる寮舎生活」⁽¹⁹⁾でも、「個人の自由を絶対に認めない寮舎生活に於ては、一方に深き交りを許さない。だから私が京子さんと親しく交らうと望むのは、既に一の罪惡視されるのである。共同の平和を破るものと断定される」として、このような関係が団体行動を乱すとの観点から非難されることがわかる。また「恐るべき姉妹熱」では「この流行病は随分前からあつたもので今始まつたものとも云へぬけれどもその弊は現今最も著しく顕はれて居る」とある。だが、その弊害がいかなるものであるかは明示されず、ただ「健全なる精神の發達を遂げさせ」るために「真面目に勉強させ」「不健全なる讀物即ち小説や或る種の雑誌を退け」るよう勧めているだけである。それが「性」との関連から批判されるようになったのは、先の「同性の愛」事件以降である。

この事件において「愛」という言葉が用いられたのは、女学生同士の親密さは、たとえそれが度を越したものであっても、それまでの「鶏姦」「男色」という性的行為を含意している言葉では呼べないものとみなされたからである。にもかかわらず、この事件以降、女学生同士の「同性の愛」は「転倒性欲」の一つとして、つまり「性」の問題と関連付け

⁽¹⁸⁾ 1911年2月17日号の『婦女新聞』に掲載されている。

⁽¹⁹⁾ 『女学世界』十一六（1910年）。筆者は寮生活に対し、「若い女の自由を奪はれ青春の華やかな時代を此の小天地に幽せられて、誰が満足するであらう」と不満を述べ、「形式に囚はれず、あらゆる虚飾を捨てて、あくまでも處女心の美しさを見せ合」い、「熱しきつた青春の血を——靈を——躍らせて、互ひの胸の秘言を囁き合ふまでの美はしき交り」を持つことを切望している。

て取扱われ批判されていく。例えば「日本の性欲研究の先鞭をつけた」（古川 1993：113）とされる1911年11月の『新公論』性欲特集号には、桑谷貞逸「戦慄す可き女性間の転倒性欲」が掲載されている。筆者はまず事件後書かれた国民新聞の記事⁽²⁰⁾を紹介した上で、「同性性交は單に女學生間に限らず、其他の婦人間にも一般世人の想像以上に盛んに行はれて居るかも知れぬ」として、「同性性欲」に関する海外の研究や情報を紹介している。しかしここでも「一時的同性性欲、即ち友情と性欲的情熱との合ひの子」というように、「同性性欲」は純粹に「性欲」の問題としては捉えられていない。そして「女學生間の同性性欲的情熱が普通の友情と異なる點」として挙げられている内容⁽²¹⁾を見ても、それが「性」の問題でないのは明らかである。

「同性の愛」事件においても実は「性」あるいは「肉欲」が問題となっているのではない。そこで（誤って）「オメ」と称されている関係と事件で問題とされるに至った関係とは、「病的肉欲」と「病的友愛」として厳然と区別されていた（『婦女新聞』8月11日号社説「同性の愛」）。そして「純然たる友愛の情の熱烈なるもの」「不自然なる熱愛」などの言葉によって問題化されているのは後者、すなわち熱烈な「友愛」の方であった。つまりこの時点では、「性的」関係である、または「性的」関係に結びつくという観点からのみ、女同士の親密な関係が注目されたわけではない。「熱情はすべての改革の動力にして、之なければ社會は冷淡沈降の状態に陥るべければ、女學生の熱情は決して之を殺すべからず。要は之を善導し燃ゆべき適當の際に燃えしむるにあり」と言われていたように、ここでむしろ問題となっていたのは「熱情」のあり方、すなわち女性の「愛情」の質や程度および方向性だったのである。

「同性の愛」は「性欲」の異常と結びつけられていたが、そこで論じられていたのは「性」ではなく「愛情」であり、その上で、女性に「適度な、方向性の正しい愛情」を持たせることが課題とされたのである。

⁽²⁰⁾ この記事には「近頃同性の戀愛は珍しいことではない（…）府立女學校の女學生間にはオメといふを使用され、或る私立學校ではデヤ（愛）におの敬語を冠してオデヤといひ、お茶の水の女學校にはお熱、學習院女學部にはオハカライ、跡見女學校には御親友、その他各女學校が皆それぞれ此の方面の言葉を使用されてゐる」と書かれており、「オメ」以外にも様々な呼称があったことがわかる。

⁽²¹⁾ ここで挙げられているのは以下のとおり。（1）手紙の遣り取りが非常に頻繁となる。（2）互に遇いたがり、話したがり、遇えば手を握るとか色々なことをする。（3）話しが長く、互いに夢のやうな空想に耽る。（4）絶えず嫉妬の焰を燃やす。（5）相手の性質を誇大に稱揚する。（6）相手の姓名を到る所、有らゆる物に書き付ける。（7）相手の特色を羨むの情がない。（8）其の愛を示すに邪魔な有らゆるものに打克つ。（9）仲の好い所を見せびらかしたがる。（10）禁せられた事を犯すというような自覚がある。（11）勝利の快を感じる。

おわりに

「同性の愛」事件を発端とした女同士の親密な関係に注意を促す言説にはたしかに、「同性愛」概念の持つ「異常／正常」の線引きが見られた。だがその線引きは「性」においてではなく、「友愛」において行われたものであった。しかし「友愛」においては「異常／正常」の分類は困難を極める。よってそれらを分類することよりもむしろ、女性に「適度な、方向性の正しい愛情」を持たせようとする方向に注意が向けられたのではないだろうか。

このように「転倒性欲」としての同性愛が女学校での愛情関係に「上書き」されたものであったならば、当時の女同士の親密な関係を「性」と「愛」を分離した上での「性」の問題として捉えることはできない。このことはまた、「性欲」という言葉が登場し普及する以前の女同士の親密な関係を理解するためには「性」という概念は十分ではないということも意味している。

『番紅花』に見られた愛情は、それを向ける対象が同性であることで何かうしろめたさを感じたりするような態度とは結びついていなかった。西洋の性科学が日本で「通俗性科学」として流行する以前、明治末から大正初期という時代はこのように、女性間の親密な関係を問題視する視線と肯定する視線が混在している時期であった。たしかに『番紅花』に描かれていたような女性間の親密さは、本人たちの認識はどうあれ、「性」と関連させるまなざしを引き出す可能性をはらんだものであった。にもかかわらず、それは地位の向上や権利の獲得、あるいは妻・母役割と結びつくことで近代国家形成に寄与することになる（牟田 1996）という女性のセクシュアリティ観では捉えきれない親密さである。そのような親密さが「愛情を正しく導く」という言説上の流れの中でその後どのように変容したのか、あるいはしなかったのかという問題については今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 赤川学、1999『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房。
折井美耶子、1985「富本一枝小伝」、高井陽・折井美耶子、1985『薊の花——富本一枝小伝——』、ドメス出版。
飯田祐子、1998「愛読者嬢の文学的欲望——『女子文壇』という教室」『日本文学』vol47。
生田花世・遠藤初子・神近市子・小林哥津、1963「座談会『青鞥』の思い出」『国文学 解釈と鑑賞』9月号。
井出文子、1987『平塚らいてう——近代と神秘』、新潮社。
岩田ななつ、1998「『青鞥』と『ピアトリス』」『鶴見日本文学』2。
小田亮、1996『性』、三省堂。
たつ子、1910「女学生同士の愛人『お目さん』の流行」『ムラサキ』六——〇（岡野幸江編、2001『アンソ

- ロジー 女と生活』、ゆまに書房)。
- 中山清美、2002『差異化と連帯感』、飯田祐子編『「青鞥」という場』、森話社。
- 平塚らいてう・山川菊栄・富本一枝・村田静子、1956『「青鞥社」のころ』『世界』第122、123号。
- 『婦女新聞』を読む会編、1997『「婦女新聞」と女の近代』、不二出版。
- 古川誠、1993『恋愛と性欲の第三帝国』『現代思想』vol.21。
- 、1994『セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる3つのコード』『日米女性ジャーナル』No.17。
- 、1996a『同性「愛」考』『imago』vol.6。
- 、1996b『自然主義と同性愛——明治末性欲の時代——』『創文』1996.9。
- 、2001『「性」暴力装置としての異性愛社会——近代日本の同性愛をめぐる3つのコード』『法社会学』54。
- 堀場清子、1988『青鞥の時代』、岩波書店。
- 牟田和恵、1996『戦略としての家族』、新曜社。
- 米村みゆき、2002『〈女教師〉という想像力』、飯田祐子編『「青鞥」という場』、森話社。
- らいてう研究会編、2001『「青鞥」人物事典』、大修館書店。
- 渡辺和子、2001『「ロマンティックな友情」の表象』『女性学年報』第22号。
- 渡邊澄子、1984『「番紅花」解題』『番紅花』復刻版、不二出版。
- 、2001『青鞥の女・尾竹紅吉伝』、不二出版。
- 渡辺みえこ、1998『「青鞥」におけるレズビアニズム』、新・フェミニズム批評の会編『「青鞥」を読む』、学芸書林。
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York & London: Routledge. (=1999、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』、青土社)
- Faderman, Lilian, 1991, *Odd Girls and Twilight Lovers: a History of Lesbian Life in Twentieth-Century America*, New York: Columbia University Press. (=1996、富岡明美・原美奈子訳『レスビアン歴史』、筑摩書房)
- Rich, Adrienne, 1986, *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose 1979-1985*, New York: W. W. Norton. (=1989、大島おかり訳『血、パン、詩』、晶文社)

(あかえだ かなこ・博士後期課程)

Intimate Relationships between Women of Modern Japan : Beginning with *Safuran*

Kanaoka AKAEDA

Recent studies on sexuality have deconstructed 'Seiai' (or romantic love) on an analytical basis that treats sexuality and love separately, focusing mainly on the former. Homosexuality has also become a common subject in contemporary sexuality studies. In this paper, I investigate intimate relationships between women of modern Japan, including those containing lesbianism. However I do not discuss such relationships as a matter of general sexuality, as the reality of the relationships shared among women of the day is not yet well known.

Male homosexuality in modern Japan has been made considerably clear. On the other hand, we do not yet know how the concept of lesbianism in modern Japan was formed, how it functioned, and what types of relationships were associated with it. In this paper, I examine discourses about intimate relationships between women from the end of the Meiji era to the beginning of the Taisho era. I discuss what types of relationships are indicated and that the discourses between these women are really over sexuality.

At the beginning of the investigation, I look at some close relationships between women described in the journal *Safuran*. *Safuran* was founded by Kazue Otake, a member of an earlier journal called *Seito*. *Seito* and its leading figure Raicho Hiratsuka were oriented towards heterosexuality. We cannot define the close relationships found in *Safuran* simply as the same as the homosexual relationships found today. I argue that the process of building relationships was understood as something sexual in accordance to their reference to western sexology.

The discourses in the period mentioned above pay much attention to intimate relationships between women. A double suicide committed by two graduates of a girl's school pulled the trigger. People came to call such relationships 'Dousei-no Ai' (love between two people of the same gender), and tended to recognize it as a matter of sexual desire. Nevertheless, it was 'excessively-radical friendships' that gained more attention within the discourses. In other words, when criticizing women's homosexuality, authorized commentators were eager to classify friendship under the dichotomy of normal/abnormal, while the topic of sexuality was disregarded. What they then put stress on was to mould women in socially acceptable oriented affection.